

『廬山遠公話』校訂上の諸問題

玄 幸子

一 はじめに

敦煌変文学作品の中にあつて『廬山遠公話』は夙に衆目を集めた資料の一つである。スタイン将来のこの写本(S.2073)には表題に『廬山遠公話』とあり、「話」という話本の形式をもつ最も早期の史料として中国文学史上大きな意味をもつと認められている^[1]。内容は東晋の高僧慧遠についての語り物であるが、史実とは異なる荒唐無稽なお話である。

最初に全文を校録した牧田諦亮『中国近世仏教史研究』(平楽寺書店、1957年)によれば、「いま研究所で龍大・谷大・大阪市大・京大等の研究者が行っている、新に撮影されたブリチッシュ・ミュージアム蔵スタイン収集敦煌文書の整理調査に関する共同研究の間に見出されたもので、浄土教の始祖慧遠についての「語りもの」である」と解説される。

翻訳は入矢義高先生の名訳がすでにあり、『仏教文学集』(中国

古典文学大系60 平凡社 1975)に収録されている。本稿では、入矢訳で未解決であつた部分に焦点を当て、以後の資料整理の状況や研究成果に照らして解決を見ることができかどうかを詳細に検討していく。

二 校訂検討

個々の問題となる箇所をとりあげて検討するにあたり、先にその手順を示しておく。まず、写本の総行数を附して原文をそのまま提示する。そのあとに入矢訳と訳注のページ数、時に必要に応じて注を引用し、その後検討をはじめめる。最後に筆者の校訂と解釈を結論として示す。以下順を追って検討する。

(原文) 知三禪定如樂便委世之不遠

七行目

・三定禪を心得マえておりました。……やがて末世の遠からぬことを悟り、^(注)そこである日、合掌して和尚に申し上げるには、

(一〇二頁)

(注二) 原文は「如楽、便委世之不遠」。はじめの「如楽」を衍文と認め、
下句は「便ち〔季〕世の遠からぬを委り」と読む。

【検討】丁福保『佛學大辭典』によれば、「三禪」とは「(界名)色界之第三禪天也。此天名定生喜樂地、由深妙之禪定生身心之快樂。」とあり、「深妙なる禪定によつて快樂を生じる」ことから、「三禪定を知りて樂しむ」ことに矛盾は生じない。「如」(平魚日)⁽²⁾と「而」(平止日)は変文資料では音通字⁽³⁾であり相互置き換え可能である。よつて、衍文ではなく、「如(而)樂」とし、上に続けるのが良いと思われる。また、「世」は丁福保によれば「(術語)梵語曰路迦[oka]、世俗也。……又、時之異名。遷流之義。」とある。必ずしも「季」字を補う必要はなく、また項校⁽⁴⁾(2006: p.1787)のように「委」即委棄之義⁽⁵⁾とするのも無理がある。「遠く人の世を離れるまでもなく第三禪天に生まれ、其の樂を得ることができた(不須遠離人世而上生第三禪天、便能獲第三禪天之樂。)」という項校の解釈では、旃檀和尚のもとを去る契機が説明されないため前後の文脈の整合性がなくなってしまうからである。よつて次のように校訂し解釈をする。

(筆者校) 知三禪定如(而)樂。便委世之不遠;
(解釈) 三禪定を知りて心楽しく、時の移ろいゆくことが遠くないことを知つて、

(原文) 既蒙師處分而已丁寧豈敢有違

一三行目

・師の指図をいただいたうえに、ねんごろなお諭し、もはや否応はありません。
(一〇三頁)

【検討】翻訳・集録⁽⁵⁾・校注⁽⁶⁾はすべて「既蒙師處分、而已丁寧、豈敢有違」と句読を切る。項校のみ「既蒙師處分而已、丁寧豈敢有違。」と異なる。「而已」⁽⁶⁾と文末助詞と捉えるか、「而して已に」と接続詞・副詞と別個に解釈するか、で解釈が異なっている。「丁寧」には「申し付ける」「言葉が懇切丁寧である」といった意味がある。翻訳他では「處分」の補足説明とするが、項校では、「その言いつけ(丁寧)には、どうして背くことができましよう」とあり、「處分」を異なる表現「丁寧」で受け再度主語(主題)に置いて解釈している。あとは五四四のリズムと七六のリズムの何れがよいかという問題であるが、この前の句は、四四とあるので、語り物であるという資料の性格上、五四四とするほうが良い。

(筆者校) 既蒙師處分、而已丁寧、豈敢有違?
(解釈) すでに師の言いつけを受け、そのお言葉が懇切丁寧であったからには、どうして背くことができましようか。

(原文) 枯松万歳之藤蘿桃花弄千春之色
二四行目

・枯松は万歳の藤蘿を□^(ま)い、桃花は千春の色を弄^(もてあそ)ぶ。
(一〇三頁)

【検討】八字句とすることと対句の構成を考えると「枯松」の下に「掛ける」「纏う」意味の動詞を、「色」を二音節にするため一字補う。項校、校注とも同じ。

(筆者校) 枯松 □□ 万歳之藤蘿、桃花弄千春之 □□ 色。

(解釈) 枯松は万歳の藤蘿を□い、桃花は千春の□色を弄ぶ。

(原文) 縦有些些施利旋(旋) 惣盤纏齋供實無財帛 一二四行目

・少々の布施は上がりますもの……(二句、原文乱れて意味不明)、
とんと財宝はございませぬ。(一〇八頁)

【検討】「旋」はこの写本では「旋」の異体字として書写される。⁽⁷⁾

「盤纏」は《唐五代語言詞典》⁽⁸⁾の解釈「提供費用。動詞」が理解しやすい。他に、「韓擒虎話本」の例「遂揀袖馬百疋、朋馳千頭、骨咄琰毘藥鹿麝香、盤纏天使。」を挙げる。ここも、諸々の品物を選んで皇帝の使者たちの用に資したということであろう。「齋供」は、『大目乾連冥間救母變文一卷』「遂即支分財寶、令母在後設条供、養諸仏法僧諸乞來者。」の例と同じく「僧侶の齋」或は《漢語大辭典》「齋供」に「寺廟中供應的齋食」とあるように「寺で供される齋の食事」である。

(筆者校) 縦有些些施利、旋物盤纏齋供、實無財帛

(解釈) たとえ些かお布施の収入があっても、瞬く間にすべて僧侶のお斎(寺内の食料)の費用に充てられて、實際財宝などござい

ません。

(原文) 你若在寺舍伽藍要念即不可今况是隨遂於我争念經

一七三行目

・もし寺院・伽藍でならば、誦經しても、いつこうに構わん。^(注七)ところが今はおれの奴じや。誦經なんぞもつてのほかじや。

(一一〇頁)

(注七) 原文「要念即不可」。いま「不可」の上に「無」の字を補って訳す。

【検討】文脈は右注にあるように「無」を補うか、「不」を削ることで非常に通りがよくなる。が、字を増減する場合には慎重を要する。増減なしにそのまま解釈する可能性を考えた場合、「你若在寺舍伽藍要念、即不可。今况是隨遂於我、争念念經」(お前が寺にいて誦經したいというのなら、それも許さん。ましてや、今は俺に付き随っておるのだから誦經などもつてのほかだ)と無理に解釈できないこともなからう。「若」ではなく「縦」という譲歩であればさらに通りはよくなる。

ここで問題となるのは「況是」の用法である。「廬山遠公話」には全部で三例用例が見える。次に他の二例の出現状況を入矢訳と併せて示す。

・數載有餘、思念空門、無由再入。况是白莊、累行要跡、伴涉凶徒、好斂惡生、以劫為治(59行) こうして数年余り、心は仏門を念

じつとも、そこへ入るすべもありませぬ。ましてや白莊はしきりに悪行を重ね、兇徒をかたらつて殺生に明け暮れ、強盗を稼業としておりました。(110頁)

・我若之(諸) 處買得你来、即便將舊契券、即賣得你。况是擄得你来、交我如何賣你?(183) もしお前をちゃんとした筋から(?) 買い取ったのなら、その時の身上書を見せれば売物になる。ところが捕まえてきたお前だ。売りに出しようもないわい(111頁)

訳文の(?)については後述する。ここで、「况是」の訳をとりあげて確認すると「ましてや」と「ところが」の二通りがある。「况是」を一つの語彙として捉えた場合「く是」を接尾辞にもつ口語語彙であり、逆接の意味を表す接続詞である。一方「况」「是」と二つの語彙が続けて用いられる場合は「いわんや」「この」といずれも実義をもつ実詞であり「况」本来の意味で用いられる。入矢訳では地の文では文言の用法に従い、会話文の中では口語語彙として解釈したことが明らかである。また、項校・校注ともに「即不可」を肯定の意味に解釈する点は一致している。以上を総合して、入矢訳の解釈が最良と考え従う。

(筆者校) 你若在寺舍伽藍、要念即(無)不可。今况是隨遂於我、争合念經?⁽¹⁰⁾

(解釈) おまえが寺にいて誦經をするというのなら全くかまわない。が、いまは儂に付き随つておるのだから、誦經などしてはならない。

(原文) 我若之處買得你来即便將舊契券即賣得你 一八三行目
・もしお前をちゃんとした筋から(?) 買い取ったのなら、その時の身上書を見せれば売物になる。(111頁)

【検討】 項校・校注が「之(諸)處」とするようには、「之」「諸」は同音により通用する。「諸處」は口語「他のところ」「別の場所」という意味である。次例参照されたし。

・此箇量口、並不得諸處貨賣。當朝宰相崔相公宅内、只消得此人。(108行目) ここの奴は、ほかに売ること罷りならぬ。ただいまの宰相なる崔閣下のお邸でこの者を御入用じゃ。(112頁)

(筆者校) 我若之(諸) 處買得你来、即便將舊契券、即賣得你。
(解釈) もし他所でお前を買ってきたのなら、すぐさま証文をもつてお前を売ることができる。

(原文) 這下等賤人心裏不改問無自擬到東都見及上下經臺陳論過 狀道我是賊令捉獲我 一八七行目

・このゲス野郎め、まだ性根は昔通りか(?) その魂胆はなあ、東都へ着いたら、畏れながらとその筋へ駈け込んで、訴状を出して内幕を述べ立て、おれを賊と訴入して、みごと引くくらせようというんじやろう (111頁)

【検討】 項校・校注諸本において「問無」の解釈に苦慮している。

項校では「間無(機謀)」とし、注に「音近之誤(一説是「奸謀」的音誤)」と説明する。ここで挙げる一説は校注の注に説明される袁寶の校注を指していると思われる。引用すると「『奸』和『間』皆見母山攝字；『謀』是明母字，『無』是微母字，明、微二母在中古實為同紐，故『謀』和『無』讀音亦近」(注〔一五四〕p.278)とある。ところがこの説明では、「奸」「間」が同音通用であることはわかるのだが、「謀」「無」については声母が近いことのみを言うだけで韻母についての説明がない。実際、「無」は遇攝合口虞韻、「謀」が流攝開口尤韻であることを考慮すれば、この二字は字音が似ているとは言いがたいのである。

項校・校注諸本が「間無」を他の表記に改めようとするのは、後文に「賊奴若有此意，機謀阿郎，願當來當來世，死墮地獄，無有出期(もし私めにそのような考えがあつて旦那様を謀ろうものなら、いくいく世の後までも地獄に落ち永劫出られぬことになるよう誓います)」(188行目)という遠公の言葉があり、「機謀」という語彙が見えることによる。しかしながら、「間」を同音普通の「奸」に改め、「無」を下につなげて文頭の反語の「得無く乎」の意味で解釈すれば、「無」を無理に「謀」に替えて読む必要がなくなる。字句のリズムも、五、五、六、四、六、四、四とおさまりがよくなる。

(筆者校) 這下等賤人，心裏不改間(奸)，無自擬到東都，見及上下，經臺陳論過狀，道我是賊，令捉獲我？

(解釈) この卑しいやつめ、悪賢いのを改めもせず、よもや、東都

に着けばお上にお目見え、訴状を出して罪状を訴え、儂が盜賊だといってお縄にかけさせようというのではあるまい？

(原文) 牙人聞語盡言實有此是牙人遂領遠公來至崔相宅

二〇〇行目

・と聞いて、仲買ども一同、「いかにもさようで」(?)と申し、

さっそく遠公をば崔閣下の邸へ連れて参りました。(二二―頁)

【検討】この資料は時に「」をつけるべきかどうか迷うことが多い。つまり、地の文と会話の境界線が明確でないところが多くみられる。よって、各文脈で個々に検討する必要がある。この場面は、帝釈天の崔大臣の別当に化身し、遠公を大臣宅で必要としているので、ほかへ売ることがまかりならぬといった言葉を受けたところである。「實有此是」では意味が通らないので「是」を音通により「事」に読み替えると、「實にそのことが有る」、つまり別当の言葉を聞いた仲買人たちがその内容を信じたということである。よって、その場にいた仲買人たちがごとごとく口に出してそう言うのは大変奇妙な状況となり、入矢訳で(?)が付けられることになったと思われる。「言」には《唐五代語言詞典》の項目で説明される通り「以为、料想」(思う、推測する)意味があり、この箇所はまさしくこの用例である。よって直接発話したのではなく「」は外すのがよいだろう。

(筆者校) 牙人聞語、盡言實有此是(事)。牙人遂領遠公來至崔相宅。

(解釈) 仲買人たちはみな悉くその言葉を本当だろうと思います。そこで仲買人は遠公を連れて崔大臣の屋敷へと参りました。

(原文) 摺藝衣服

二二五行目

・衣装の折り畳み(?)

(一一二頁)

【検討】項校・校注ともに「藝」を字形相似による「藝」字の書き誤りとするのに従う。項校の注を引用すると、「原文『藝』爲『藝』字之誤、『摺藝』即『摺疊』。《說文》；『藝、重衣也。』段注；『凡古云衣一襲者、皆一藝之假借。藝讀如重疊之疊。』とある。変文資料では、『捉季布傳文(P.319T)』『典倉藝紙而无筆』『維摩詰經講經文(S.457)』『衣縷製成錦葉埴』『季布歌一卷(S.5439)』『典倉藝紙而无筆』などにこの字が用いられている。

(筆者校) 摺藝(藝) 衣服

(解釈) 衣服を畳む

(原文) 湏臾之間便□下講男女齊散

二二三行目

・ほどなく講釈は終わり(?)、聴聞の衆はみな引き上げました。

(一一四頁)

【検討】この箇所、写本原本は紙が欠けており「便」の下の字は上方一部のみ残されている。校注では「即」を補うのが良いとしているが、残された字形から本来書写されていたのは「即」字ではないようである。(図一参照)が、ほかに同定できる字を見つけないので一文字を□であてておく。

(筆者校) 湏臾之間、便□下講、男女齊散。

(解釈) しばらくして、講釈が終わると聴衆はそろってお開きとなりました。



図一

(原文) 比来兩人入寺聽經一人無是入得寺中聽經一人有是貪性當即却廻而去

三二九行目

・二人が連れ立って寺へ聴聞に参りました時、一人は……、寺へ入って聴聞いたしました、もう一人は貪婪どんらんしやうの性しょうあるため、すぐに引き返してゆきました。(一一五頁)

(注十三) 原文「一人無是」。これでは意味をなさない。やはり原文が不完全なためである。

【検討】「有是貪性」については項校・校注ともに集録の校訂の誤りを正す¹²⁾。その上で「無是」の後に「貪性」を補足している。指

示詞の後の名詞の省略は既出の情報に適用され得るであろうから
項校・校注と同様補足して校訂する。なお「比来」は口語語彙で
あるが、大きく「以前」^{いぜん}「近頃」^{ちかごろ}「本来」^{ほんらい}の意味を持つ。¹³項校は「從
前、原來」とし、校注は「本来」の意味とする。ここでは、「むか
し、以前」の意味に捉えるのが妥当であろう。

〔筆者校〕比来兩人入寺聽經。一人無是「貪性」¹⁴、入得寺中聽經。
一人有是貪性、當即却廻而去。

〔解釈〕むかし二人の者が寺に入って説法を聴聞しようとした。
一人は何ともなく入って聴聞いたしますが、一人は五欲を捨
てられずぐさま踵を返して帰って行きました。

〔原文〕忽憶不來之人即便心生肺忘

三六一行目

・あの不參の人をハタと思ひ出しましたとたんに…の念が起¹⁵こり、
¹⁴注十四

(一一五頁)

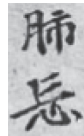
〔注十四〕原文「即便生肺忘」。ここも意味不明。

〔検討〕入矢訳では原文の「心」字を見落としていることが、注か
ら見て取れる。また「肺忘」の解釈がよくわからない。項校・校
注ともに「肺(廢)忘」とし「廢忘・遺忘。」と注を付けるが、こ
の解釈も不明である。「たちまち忘れていたことを心に生じ」とい
うことであろうか。また「廢忘」が「遺忘」という意味である根
拠も示されていない。それならばむしろ字形の類似による「睚」

字の書き誤りとし、「忘」を同音字の「望」としてはどうだろう
か。「睚(希)望」であれば、「心生」との組み合わせも問題ない。
また「雖退天處心生歡喜、於閻浮提心生憍望。眼中淚出、其聲則
僂。」(『毘耶娑問經』卷下)などとあるように、佛教では「憍(希)
望」は多く「欲を生ずる」ことを表し、雜念を生む結果を引き起
こす。

〔筆者校〕忽憶不來之人、即便心生肺忘(希望)

〔解釈〕ふと来なかつた人を思い出すと、心にその人を思つて雜念
を生じ、



図二

〔原文〕請相公高枕無憂只時講降時便去

四〇八行目

・なにとぞ枕を高くして氣を安んぜられますよう。講釈の始まる
(?) ころを見計らつて参りましょう。(一一七頁)

〔検討〕原文「只時講降時」を集録は「只時(待)講降時」と校訂
する。校注は「時」自体に「待」の意味を認めうるとして原文を
改めない。一方項校は注もなく「待」に改める。すぐ続いて「講
降時」と「時」が現れるので、ここは意味を明確に示すためにも
「待」に改めるのが良い。偏旁の相似による書き誤りと考えられ

る。ただし原文の文字の記述は必要であり、集録に従う。問題となるのは「只時(待)講降時便去」を遠公の言葉とするのか、地の文とするのかであろう。入矢訳ではこれを遠公の言葉の続きとして訳出している。一方集録・校注・項校はすべて地の文としている。すぐ後に「須臾之間已至」とあるので、地の文として読む方が文脈は繋がりがやすいと思われる。

また、入矢訳で明確に訳出できなかった「講降」であるが、「開講」「上講」「下講」という語彙は見えるが、「講降」というのはこの箇所のみである。「降」には「賜う」の意味があり、すぐ後の開講の次第の最初は皇帝を称える口上から始められることから、ここはお上公認の講経を開くことを表現したものだと考えられる。

(筆者校) 請相公高枕無憂。」只時(待)講降時便去。
(解釈) どうか旦那様、枕を高くしてご心配なさいませんように願います。」そこで、お上公認の講経が行われるときになると出かけていきます。

(原文) 噴善慶曰亡空便額我佛如来妙典義里幽玄佛法難思非君所

會

四二六行目

・善慶を叱りつけて申すよう、「見当ちがいも甚だしい〔注二五〕。そもそもわが仏如来の微妙みみょうの典のりは、その義理は幽玄。思議も叶わぬ御教みえなれば、そちに解わかるものではない。(一一八頁)

〔注二五〕原文「亡空便額」。後文では「亡」を「忘」と書いてあるが、いずれも「望」の誤りであろう。「空を望んで便ち額す」としか読めないが、ウェイリ氏は「虚空に向かつて罵る、即ち your criticisms fail to get home の意。額は罵る意の slang で、『封氏聞見記』に見える」と注する。なお疑問は残るが、一応これに従う。

【検討】「亡(望) 空便額」については中国においても蔣禮鴻をはじめとして諸氏が取り上げ検討を加えてきた¹⁵⁾。一応の結論を見たものとして《唐五代語言詞典》(p.88) の解釈を紹介すれば、「平白、无端地指斥、責罵。忘、望、字的同音替代。又誤作亡。平額、训斥、責罵。」とある。つまり「亡」「忘」は「望」と改め、「額」は「叱責する、説教する、罵る、どなりつける」といった意味だと解釈し、全体の意味を「訳もなく、理由もなく罵り叱ること」としている。実はこの語彙はここで検討している箇所の後にも見られる。併せて検討してみよう。

・賤奴擬問經文、座主忘空便額。(四四二行目)

・この私が経文のことを問いただそうとすると、座主どのの曰くは、『見当ちがいも甚だしい』とやら。(一一八頁)

この場面はさきに「亡空便額」と叱責された善慶が同じ言葉で道安をやり込めている場面なので、道安の言葉を引いたのではなく、道安あなたこそ「亡空便額」してはいませんかと言っているのである。よって、「この私が経文のことを問いただそうとすると、座主どのが訳もなく大声で叱責されたのです」と解釈したいとこ

ろである。よって、ここについても次の通り校訂する。

(筆者校) 噴善慶曰「亡(望) 空便額。我佛如来妙典、義里幽玄、佛法難思、非君所會。

(解釈) 善慶を叱りつけて「わけもなく大声でとなりつけるとは！わが仏如来の妙なる經典は、義理は幽玄にして仏法は考えることも難しい。あんたに解るものかね。

(原文) 閻黎去就也一箇志道霄僧所出言問不合聖意

四三四行目

・閻黎の行き方は、やはりまだ未熟者の行者(?) というもの。その言辞、その詰問、どれも仏の旨と違っておる。

(一一八頁)

【検討】「去就」は「態度・礼儀」の意味で用いられる。日本語の同形語は「進退・どう身を処するかの態度」ということで少し意味が異なるので注意が必要である。「志道」は『論語・里仁』「士志於道、而恥惡衣惡食者、未足与議也」とあるのによる。この善慶の発話の前の道安のことばに『論語』を引用して叱責する箇所があり、それに対抗して故意にこの語彙を使用したものである。さて、問題は「霄僧」であるが、まず「僧」の字体に些か疑問が残る。この写本では多くがきちんとした楷書体で書写しているが数か所崩した部分がある。参考までに該当箇所類似した書き方

をしている部分を後にぬきだす。さらに集録で「像」と校訂していることも検討するため「像」字の例も挙げておく。「像」字を書きかけて途中でやめたかとも考えられるが、ここは一旦「僧」字で校訂しておく。ただ「霄僧」という語彙は難解である。「霄漢」「霄漢」が「仙人」「位の高い者」といった意味であることから類推すれば「霄僧」は一般の僧侶を超越した立派な僧と読めるかも知れないが、疑問が残る。校注では項楚校が「霄僧」を「肖像」と校訂し「猶云模様也(有様ということ)」と解釈していると注を付けるが、最新の項校では、本文は「霄像」(p.1905)とし注二九に「下字應是『僧』字」(p.1912)としているので、やはり今のところ「僧」と読まざるを得ないだろう。

(筆者校) 閻黎去就也一箇志道霄僧、所出言問、不合聖意。
(解釈) 閻黎の態度礼儀もまた正しい道(外典に言う志道)を志しつつもはるか天上の高い位にふんぞり返っている僧侶のもの。その言葉問いかけは仏の心に合っておりはせぬ。

僧

9行目

104行目

3行目

図三

(原文) 汝若見吾之鼓不辭對答往來

四五二行目

・わしの手並(?)を見たいとあらば、問答論戰辞みはせぬぞ。

(一一九頁)

【検討】「見吾之鼓」についてよく理解がいきなないということのようだが、項校が詳しく注を付けているので引用してみよう。

項校注〔五五〕見吾之鼓：文字疑有誤。「鼓」應指「論鼓」。
天竺僧侶欲求辯論，則擊打論鼓。《大智度論》卷一一：「是婆羅門，徑至鼓邊，打論議鼓。國王聞之，問是何人。眾臣答言：『南天竺有一婆羅門，名提舍大論議師，欲求論處，故打論鼓』王大歡喜，即集眾人而告之曰：『有能難者，與之論議』」以後省略

項校に従えば、この太鼓は議論を求めるものが打ち鳴らす論議の鼓である。「わしの論議の鼓を見たというなら」というのは、「多量なりともわしが議論をする気持ちがあれば」ということであろうか。つまり、道安は当然のことながら議論を求めてはいないのであるが、せめて善慶が道安の論議の太鼓を垣間見でもすれば、という揶揄を表現したものと考えられないだろうか。入矢訳で（？）を附し、項校で「文字疑有誤（文字に誤りがあるようだ）」と言わしめるのは、恐らく道安が論議鼓を持ち出すはずがないという点にあるだろう。しかし、ここでの「吾之鼓」を道安の議論をしようとする意図を象徴するものと捉えれば、前述の理解が可能になろう。

（筆者校）汝若見吾之鼓，不辭對答往來

（解釈）おまえが少しでもわしの論議鼓を見たのなら（わしが多少なりとも議論しようという気持ちを見せたのなら）、問答するのでも厭いはしない。

（原文）三者喻湧泉之義湛湛不滅不流經文長在世間流轉無休無歇
四七九行目
・三つ、たとえば湧き出づる泉の、滾々と流れて滅びずむ（？）
まらざるがごとく、經文は永しえに人の世を流轉して止むこと
はない。
（一一〇頁）

【検討】要は「不滅不流」の読みであろうか。ここは並列に読んでは意味を為さない。よって「滅して流れざるなし」と最初の「不」を次の「滅不流」全体を否定すると考えればよい。「湛湛」は深く透き通った水の様をいう。

（筆者校）三者、喻湧泉之義、湛湛不滅不流、經文長在世間、流轉無休無歇。

（解釈）その三は、湧き出る泉に例えられる意味である。深く澄んだ泉の水が枯れて流れなくなることがないのと同様、經文は常に人の世にあって、流轉して止むことがないのである。

（原文）汝若要問但請問之今對与前疑速說
四九九行目

・もし尋ねたくば、何なりと尋ねられい。……（この句未詳）。さ

つさと申せ

(二二〇頁)

【検討】入矢訳で未詳とされるのは「今對与前疑」の句である。校注は特に注記しない。項校は「与」を「以」に改め「對以前疑」とは「以上の疑問に答えた(即回答以上の疑問)」ということであると注を付ける。また、校注は「今對与前疑速説」に句読を打たないが、項校は「速説」の前に読点を打つ。入矢訳も項校と同じく読点を打ち解釈をしている。

ここは校注の校訂に従う。「速説」は善慶に向かつて言うのではなく「先の疑問については今速やかに説きあかしたぞ」という道安自身の説明と解釈するのが妥当であろう。善慶の發話をうながすのであれば、「速問」というのが自然だと思われる。

(筆者校) 汝若要問、但請問之。今對与前疑速説。

(解釈) 尋ねたきことは全て尋ねて下され。先の質問には今速やかにお答え申した。

(原文) 闍梨適來所說言詞大遠講讀經文大錯物是信口落荒

五一九行目

・只今の闍梨の言説は、講讀(?)とは正反対、經文とも大違い、すべて出まかせのちゃらんぽらん。(二二二頁)

【検討】入矢訳は句読を「闍梨適來所說言詞、大遠講讀、經文大

錯」と切つて解釈したものと思われる。一方項校・校注は、ともに「闍梨適來所說言詞大遠、講讀經文大錯」とする。校注は項校の「遠、似應作違(遠は違と校訂すべきだ)」を引用し「項説近是(項楚説はほぼ正しい)」と按語を添えるが、最新の項校は「大遠」と校訂し、更に注を付けて「大遠、非常遠、形容遠違背離經義(非常に遠いこと。經義に遙かに遠く。)」と解釈したうえで『諸法無行經』の用例などを挙げる。

結論から述べると句説は項校・校注に従うのが良いだろう。「大遠」の解釈だが、「ひどく離れる、距離がある」という解釈も良いだろうが、「遠」には本来上声と去声の二つの用法があり去声には「違背、乖離(背く、背理する)」の原義がある。「言詞」が離れるというのは対象がなければ意味をなさない。そこで入矢訳では「講讀」から離れると考えたものの、疑問を残すことになったのである。ここは、原義の通り「ひどく背理する」と解釈すべきであろう。

(筆者校) 闍梨適來所說言詞大遠、講讀經文大錯、物是信口落荒

(解釈) 闍梨の先ほどのお言葉は大いに道理から外れております。經文を講讀しても大間違、すべて口から出まかせ、嘘ばかりでございます。

(原文) 將此風分為八般引義臺友孕説不盡

五二九行目

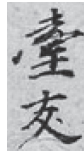
・この風は八種(いわゆる八風)に分けられるが、一つ一つ(?)

説明しようにも、おいそれとは説き尽くせぬ (二二二頁)

【検討】「引義臺友」が難解である。校注は「友」を「支」と校訂する。「友」と「支」は写本の字体が非常によく似ており、判断が難しいところではある。校注に従い、さらに「臺」を字体相似により「壹」の誤写としてみよう。「教理の一本を引用しても」と解りできようか。疑問が残る。

(筆者校) 将此風分為八般、引義臺(壹)友(支)、卒(卒)説不盡

(解釈) この風を八種に分け、その教理の一つを引用しても、にわかには説き尽くすことはできない。



図四

(原文) 早是入吾師位待我拜謝相公廻来与汝宣揚政法

五五行目

・じゃが〔仮りにも〕師の我が位を占めたからには(？)、これより閣下にお許しを頂いたうえ、改めてそなたのために、正法しょうぼうを開示してつかわそう (二二二頁)

【検討】「早是」は「すでに」を意味する口語語彙である。「吾師

位」は「吾師／位」ではなく「吾／師位」と分析する。つまり、本来善慶の場所であった大師の位を指している。よって、「入」の主語は善慶であり、道安ではない。「政」「正」は同音字である。(筆者校) 早是入吾師位、待我拜謝相公、廻来与汝宣揚政(正)法(解釈)すでに(本来の)大師の位に入ったのだから、閣下に御礼を申し上げてから、戻り来たってあなたに正法を説き聞かせてあげよう

(原文) 弟子若愚此生死後必沈地獄

五六〇行目

・……今生終わって死せし後は、必ず地獄に落ちましょう

(二二三頁)

(注四五) 原文は「弟子若遇」。意味も通じないし、衍文と認めて訳さないことにする。

【検討】項校・校注ともに「愚」を「遇」に校訂する。これに従う。さらに項校では「此生」を「此身」にするが、根拠も示されず、ほかに「身」に作るものもないので単なる誤植であろう。「弟子若遇」は確かになくとも文脈は通るが、衍文とまでは言えないだろう。「弟子若わたくしし此生の死後に遇わば必ずや地獄に沈まん」と読むことはできよう。

(筆者校) 弟子若愚(遇) 此生死後、必沈地獄。

(解釈) 弟子がもし死ねば、必ず地獄に落ちましょう。

〔原文〕 卿宰相排比何鉢鼎沸威儀直入寺中

五七八行目

・ 卿臣宰相の居並ぶさまは、積尊をお迎え(?)する威儀と異なりません。(「迎えの行列は」まっすぐ寺内にはいり、

(二二三頁)

【検討】 まず「鼎沸」の「沸」は原文でも間違はなく「沸」に作る。「鼎沸」は「鼎の水が沸き立つこと」から引伸して「沸き立つさま」「騒がしいさま」を言う。「何鉢」は偏旁の誤写とみなし「何殊」と校訂する。「卿宰相排比」については「排比」は列をなして並ぶことを言うが、「卿宰相」が字数からも落ち着かない。一字欠けていると思われる。項校・校注ともに徐震堦¹⁸⁾に従い「公」字を補う。これに従う。「威儀」はここでは皇帝や大臣の従者をいう。(筆者校) 「公」卿宰相排比、何鉢(殊) 鼎沸、威儀直入寺中、(解釈) 公卿宰相が列をなして居並ぶのは鼎の水が沸き立ちあふれ出るかのよう、従者たちはまっすぐ寺の中へ入りますと、

〔原文〕 毎謝君王請命呂僧却擬歸山

五八〇行目

・ かねがね君王には、忝くも僧として安堵させて頂きましたが(?)、実は山に帰りとう存じます。(二二三頁)

【検討】 校注では項楚校に従うとして「請命」を「清命」に校訂するが、項校最新版では、「請命」は「邀請」であるとして「清」に

改めない。寧ろすぐ後にでてくる「清命」を「請命」と改める。「目」について校注では「臣」の俗字とするが、「以」の異体字とする項校が正確に記述している。項校の注を引くと「此字本是以^レ字異體、這裏是^レ臣^レ字形誤。^レ臣僧^レ是僧徒對君王的自稱、本篇下文有^レ臣僧於大内蒙陛下供養數年^レ之語。」とある。字形相により「臣」字を誤写したものとし、「臣僧」は僧侶の君王に対する自称であると説明する。全面的に項校に従う。

(筆者校) 毎謝君王請命、目(臣) 僧却擬歸山

(解釈) 王様のお招きはいつも感謝申し上げておりますが、臣僧は山に帰りたいと存じております。

三 まとめ

日本語翻訳資料から未解決部分の再校正をテーマに検討してきたが、ここで取り上げたのはごく一部に過ぎない。入矢先生の最初の翻訳からすでに四〇年以上経て、この間、原本資料が公開され、工具書もほぼ完備し、口語研究自体も発展、深化するなど、様々な面で進歩した状況を反映させれば、未解決問題に関しても当然のことながら解決の糸口が見つかるはずである。このような予想と期待のもと、いくつかの問題について検討を加えてきた。結局未解決のままに暫定的な校訂に終わってしまった場合もあり、敦煌文献の校訂作業の難しさを改めて確認することとなったが、いくつかの問題は期待通り解決をみた。いずれ全面的な訳注

をだすべく計画中である。本稿はその基礎作業の一環として位置づけた。

注

- (1) 変文資料には『韓擒虎話本』があるが写本に表題がなく仮に付した題であるため、原写本に表題を残す『嶺山遠公話』が唯一の確実な話本資料と認められる。
- (2) 『廣韻』での韻分類による。(平声・魚韻・日母)のように(四声・韻日・声母)を示す。
- (3) 羅常培《唐五代西北方音》(四三頁、四五頁)では「魚」韻と「脂」支微」の通轉が論じられ、「如」「而」とも「[ɹi, ʒi]」とあり藏文からの再構音も同じである。
- (4) 『敦煌變文選注』(項楚著 1990 巴蜀書社、増訂本 2006 中華書局) 校記。
- (5) 『敦煌變文集』(王重民等 1957 人民文学出版社) 録文
- (6) 『敦煌變文校注』(黄征・張涌泉 1997 中華書局)
- (7) 黄征著《敦煌俗字典》2005 上海教育出版社 p.466参照。
- (8) 江藍生 曹广順編著 1997 上海教育出版社
- (9) 変文資料には「本是」「多是」「忽是」「雖是」など「是」を接尾辞にもつ口語語彙が多くみられる。
- (10) 反語の疑問詞。現代語の「怎、怎样」に相当する。
- (11) 是(上紙禪)、事(去志崇)の音通については、
- (12) 集録では何の注記もなく「是有」とする。
- (13) 《唐五代語言詞典》(p.21)では「①本來 ②近來 ③往昔、先前」としてそれぞれに用例を挙げる。
- (14) 項校 p.1889 注〔一九〕・校注 p.286 注〔二九四〕「廢忘」義為遺忘……
- (15) 入矢譯に遅れること十年前後、特に八十年代に関連の論文が多く発

表された。蔣禮鴻《敦煌變文字義通釋》(増訂本 1981《待質録》で検討されるのははじめ、江藍生《亡空便額》別解》《中国語文》1983年2期)、袁宾《亡空便額》校释质疑》《中国語文通讯》1983年第5期)などがある。

- (16) 注〔三五二〕
- (17) p.1933 注〔一〕
- (18) 《敦煌變文集校記補正》1958 華東師大學報 人文科学
- (19) 影印本出版の外、IDP (International Dunhuang Project) のカラ1写真公開を指す。

【写本・翻訳】

・S.2073

・入矢義高『仏教文学集』(中国古典文学大系60 平凡社 1975)

【引用・参考文献】

- (變文集)
- 王重民等『敦煌變文集』(1957 人民文学出版社)
- 黄征・張涌泉『敦煌變文校注』(1997 中華書局)
- 項楚『敦煌變文選注』(1990 巴蜀書社、増訂本 2006 中華書局)(工具書など)
- 黄征著《敦煌俗字典》2005 上海教育出版社
- 江藍生・曹广順《唐五代語言詞典》1997 上海教育出版社、蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』中華書局 1959年(第1版)、1960年(第2版)、1962年(第三版)、上海古籍 1981年(新1版)、1988年(新2版)、1997年(新3版、増補定本)
- 羅常培《唐五代西北方音》1933
- 徐震堦『敦煌變文集』校記補正』《華東師大學報》1958年第一期)、『敦煌變文集』校記再補』《華東師大學報》1958年第二期)

On various issues in recension of Lushan YuanGong Hua (廬山遠公話)

GEN Yukiko

The Lushan YuanGong Hua (廬山遠公話) of Dunhuang Bianwen (敦煌變文) — the Dunhuang version of the Scripts of the Eminent Monk Huiyuan of Mount Lu — is the earliest storytelling novel (話本) ever found through the present time. It is considered a work of great value in the context of historical studies of colloquial language, literature, and religion. This work has long been a subject of scholarly attention, including a Japanese translation by Dr. Iriya published in 1975. However, due to problems with the process of researching the Dunhuang manuscript research in the 1970s, many problems remained. This paper, focusing on unresolved issues, presents a solution based on the outcome of Bianwen research, which has advanced dramatically in recent years. As a result, we have confirmed that said issues can be resolved on various aspects including organizing Tongjiazi (通假字: Chinese interchangeable characters), correcting punctuation, analyzing colloquial vocabulary, and more.

キーワード：廬山遠公話(Lushan YuanGong Hua)、敦煌變文(Dunhuang Bianwen)、
校訂 (recension)